妖精たちを消費する
―アジアにおける少数民族観光の構造と変容―

須　藤　　廣
（文学部）

キーワード
少数民族観光、表舞台、裏舞台、真正性、観光文化、生活文化

はじめに―観光による文化の再統合と排除

近年、アジアにおいて少数民族の希少性に焦点が当てられ、多文化共生の視点よりも「絶滅危惧種」的新奇性に人々の関心を集め、「森の妖精」「山の妖精」と称えられ、観光の対象となりつつある。この稿では、現代の観光が何を志向しているのかについて考察しつつ、そのこととアジアの少数民族の観光化との関連について議論し、さらに少数民族の観光の問題点について分析してゆきたい。

現代社会において観光は、場所の意味と価値の再創造と再編成に関わっている。近、現代代社会における文化変動や社会変動は、伝統社会が持っていた意味生成能力を失効させ、人々に日常生活の諸領域における意味の統合を難しくさせる。近代化とは＜世俗化＞と＜合理化＞の過程であり、そのなかで現代文化は、価値の多様化と混乱といった「アノミー」的諸様相を露わにする（ウェーバー 1989、バーガー 1987）。そのなかにあって、しかしながら、近代文化とは、近代自らが崩壊に力を貸したはずの意味と価値の混沌に抗し、合理性で持って「意味」と「価値」を再編成しようともしたものでもあった。

モダニズムの芸術や哲学はそういった矛盾を含んだ「批判的」視点をよく表していた。そしてまた、モダニズム文化を乗り越えようとするポスト・モダニズム文化も、意味の崩壊に抗し、価値の再編成を図るという意味においては、モダニズム文化を引き継いでいる。とはいえ、その根底にあるのは「合理性」の一義性を否定したところに成立する象徴主義と多義性への志向である。ポスト・モダニズムの建築家ロバート・ベンチューリは、一見無駄な装飾だらけに見える1970年代のラスベガスの街の象徴主義を賞賛した（ベンチューリ他 1978）。合理性で文化

の無意味化に対抗するのではなく、合理を超えたな象徴主義的多義性や他者性を持って文化的価値の再創造を目指す、このことこそモダニズムを引き継いだポスト・モダニズムが目指していたものであった。

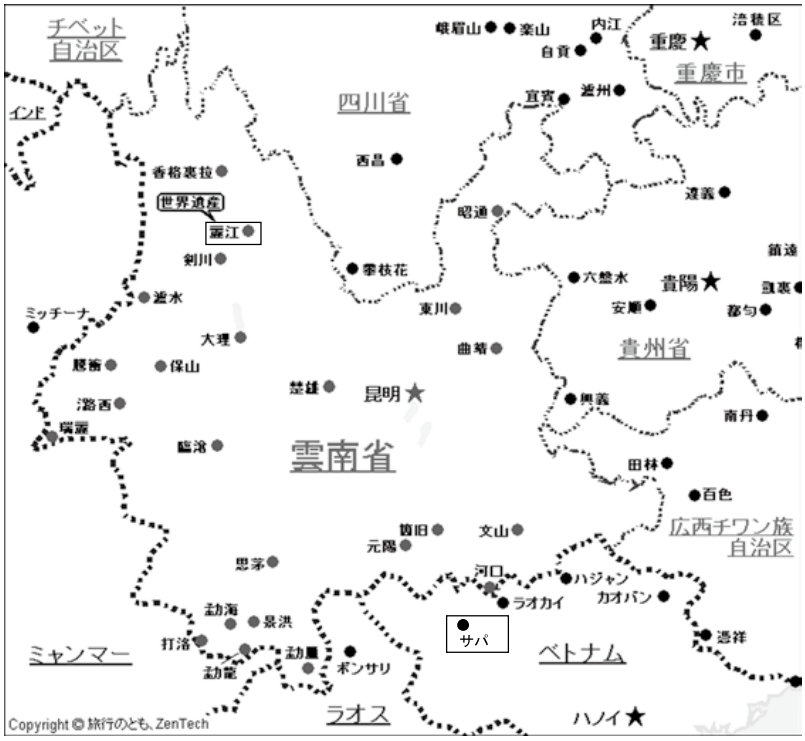
以上のような特徴を持つポストモダン文化と観光文化の近似性については数々議論がされてきた（アーリ 1995、2003、須藤 2012）。両者に共通するものは、手短に言えば、「意味」と「価値」の「多義」的な再創造である。「多義性」的という要素こそがポスト・モダニズム文化の要諦なのであるが、それはモダニズムが持っていた「合理性」という一義性に対抗するためのものであった。ポスト・モダニズムはナイーブな「合理性」信仰に対する批判を通過していることから、多くは「伝統主義」にそのまま後退することはなく──一部は「伝統主義」に回帰していったが──商業的で人工的な、あるいは批判的で再帰的な、文化を志向していった。伝統主義が意味と価値を権威主義的に──だからこそ「自然」に──作り出すのに対し、ポスト・モダニズムはそれらを、人々の作為や選択により──商業主義であれ、ある種の「合意」により──「人工的」（あるいは「再帰的」）に作り出そうとする。

ポスト・モダニズムは芸術文化領域の反権威主義的運動であったのだが、同時に、文化領域へとフロンティアを広げてきた消費社会の結果である「生活の審美化」が作り出した様式であったといえる（フェザーストーン 1999：37-60）。伝統的に宗教や権威主義の力を借りてある種の「非日常」的他者性や超越性を創出していた芸術領域が、現代では商業主義の力を借りて、自らを再創造してゆくといった構造は、観光による文化の再創造の過程にも通底している。現代の芸術文化も人々のライフスタイルへと浸透しているが、観光文化は私たちの生活により近い文化の様式へと浸透している。そして、現代の観光文化は、ポスト・モダニズムの芸術文化と同じような文脈における「再創造」と「再構成」という特徴を色濃く持っている。

よく言われるように、観光は日常性から非日常性へと移り行く（日常──非日常──日常と時間が流れる）、リアリティの「ずれ」で成立している（Graburn 1989、アーリ 1995）。ここではこういった観光の「儀礼構造」を一つの定理として踏襲しようと思う。前近代における巡礼観光は、およそどの文化においても宗教的「儀礼構造」に依存してはじめて成立していた。伝統社会の「儀礼構造」は、宗教的権威によって人々の心に「自然」なものと訴えたのに対し、現代の観光文化の「儀礼構造」は宗教的権威にはもはや依存することはできない。すなわち、現代においては観光的「非日常性」は「自然」に作り出すことはできない。現代の観光生産者の苦悩はまさにここにある。現代においては観光的「儀礼構造」は──作為的かどうかは別にして──常に「人工的」に作られ、維持されなければならない。

こういった「新奇性」、「非日常性」と「人工性」とが交差する地点に現代の観光文化はある。ここで取り上げる「少数民族観光」は、まさにその特徴を拡大して我々に見せてくれる。この

稿では、「新奇性」「非日常性」と「人工性」が織りなす矛盾に焦点を当てながら、そのために起こる文化の「再構成」―ここでは「再構成」しつつ「生活文化」を「観光文化」へと包摂―する様と、そこから非観光的な要素(「観光」に適合しない要素や人々を)排除してゆく様を、観光に関わる権力の問題と絡めて考察しようと思う[1]。



少数民族居住地域

1　少数民族観光における「表舞台」と「裏舞台」

観光の儀礼構造を最も顕著に持つものは少数民俗観光であろう。列車やバスといった交通機関は先ず、ターミナルのある町の中心部へと観光客を運ぶ。町の中心部には「環境バブル environmental bubble 」(観光者が自国と同じ程度の快適な生活を送れる「守られた環境」)を持つホテルが観光者を待ち受ける。観光客はそこで「安心」「安全」を確保しつつ、そこから「異郷」へと向かう。観光客が見るべき異郷は、大抵は、町からある程度離れたところに存在する。町にも異郷の文化は展示され、演じられているものの、それらは町から離れた異郷にある「真正」なもののコピー、あるいはそれらしい「パスティーシュ」でしかない。それでも十分観光客によって期待された文化は展示され、演じられてはいるのだが、ほとんどの観光客は「本物」を目指して、町から外へと足を踏み出す（そうすることを観光地も期待する)。ハワイのオアフ島観光を例にとって簡単に説明すれば、島の南側に位置する人工の町ワイキキ

は[2]「表舞台front stage」であり、島の反対側にあるノース・ショアは「裏舞台back stage」にあたる。ハワイでオアフ島のみの観光をする場合でも、ワイキキを見るだけで満足する観光客はあまりいない。多くはワイキキに飾られ、売られている文化（や自然）が「本当に」存在するとされている島の反対側（あるいは東側）まで足を伸ばす（ように薦められる）。オアフ島以外の島を観光する者にはさらにこの構造が深まる。すなわち、観光客が宿泊する町は「表舞台front stage」であり、町の外側の「本物」があるとされている場所は「裏舞台 back stage」である。すなわち、この手の観光は「表舞台」から「裏舞台」をのぞき込む構造を持っている。

この「表舞台/裏舞台」論は、現代文化の「儀礼構造」を説明する際によく使われているのだが、それらの理論的源流は、現代人が不安定な社会的リアリティをどのように維持するかについて、都市における人類学を描き出したアーヴィン、ゴフマンの理論にある。ゴフマンによれば「表舞台front stage」（または「表領域front region」）とは、対面的状況のなかでテーマとなり準拠点となっているパフォーマンス（あるいは役割）が演じられる場である（ゴフマン 1974：125）。結婚披露宴なら花嫁、花婿、その親族、一般参列者（この中にも上司、同僚、友人等カテゴリーが分化するであろう）の役割が振り分けられ、それにふさわしい身なりとパフォーマンスが期待され、普通はその期待に沿って、役割が演じられる（お色直しで中座した新婦の席に友人が座って写真を撮るといったような「悪ふざけ」でさえ、「表領域」の役割が十分意識されている）。このようなテーマとなっている役割に沿って（上手く演じるかどうかは別にして意識の上では）リアリティが維持されるよう「型どおり」に演じられる場、それが「表舞台」である。

これに対して、「裏舞台back stage（裏領域back region）」とは、その場にふさわしい（と期待される）パフォーマンスが行われることが意識的に否定され、他の役割が演じられる場のことである（ibid.：131）。結婚披露宴でいえば、（披露宴の前、あるいは途中や後）新郎新婦の控え室に友人が訪問した時の新郎新婦の役割がそれにあたる。そこでは新郎、新婦も披露宴の主人公という役割は解かれ、衣装がきつくて苦しいことや、叔父の宴会芸が恥ずかしいことや、お色直しの衣装の色にこだわったことが語られ、さらには酔っ払った新郎の行動に対して新婦が口汚くののしるのを見るかも知れない。ここでは、披露宴で期待された役割と違った役割（「本音」と呼ばれている部分）が演じられる。一般的には、演じる者にとっては「表舞台」は「非日常」であり、「裏舞台」は「日常」であることが多く、観客側からすれば、それとは全く反対のことが多い。ゴフマンの分析は静態的なものであり、人々がどのようにそれぞれを演じ、それぞれのリアリティを維持しているかに焦点を当てているが、その構造がどのように変動するかの理論を持ってはいない。ゴフマンの分析にメディア環境の変動という要素を重ね合わせたのがメイロウィッツである。社会における主流のメディアが印刷メディアから電子メ

ディアに変わった時、今まで情報へのアクセスを分離していた壁が崩壊し、すなわち、プライベートとパブリック、フォーマルとインフォーマルの区別が曖昧になり、社会的リアリティやアイデンティティのあり方は一変する。すなわち「表舞台」と「裏舞台」を分離していた壁は溶け出し、社会における状況の定義の保持は困難に陥る。現代社会においては、社会的権威を長く保持するのは難しくなる。こういった事態をメイロウィッツは「場所感の喪失no sense of place」と―本の題名でもあるが―で表現した(メイロウィッツ 2003)。観光における交通機関の発達や「裏領域」をも簡単に見せてしまうメディアの発達、あるいはローカル・ガイド等「裏領域」を説明する語り手の出現等、観光においても「メディア」の変容は激しい。観光のリアリティの変容にも、メイロウィッツの理論は応用可能である。

観光理論において「表舞台/裏舞台」論を意識的に展開したのはディーン・マキャーネルである。彼は観光の演出に、この「表舞台」と「裏舞台」との差異と対立が使われていることについて考察している（マッキャーネル 2012)。マキャーネルが観光地と観光客がこの構造を作り出していることを強調する。観光地にとっては「裏舞台」は演出されなくてはならないし、観光客は「裏舞台」を探し出さなくてはならない。

以上のことからも分かるように、観光客は今でも建前の「表舞台」から、「本もの」が存在するはずの「裏舞台」へと向かう「巡礼」なのである(マキャーネル 2012)。あるいは観光は、「巡礼」のシステムがもつ構造を今でも持っている。観光客にとって「表舞台」は容易に日常化する俗なる舞台であるが、「裏舞台」は聖なる「非日常」であり、日常化から逃れるべき場なのである。

2　ベトナム・サパの場合

サパの町

アジアの少数民族観光地はほとんど以上のような構造を持っている。特に、この構造を鮮明に持っている観光地がベトナム北部、中国とラオスの国境付近に位置するサパ（Sa Pa）とその周辺であろう。人口４万人弱のこの地域（Sapa District）では、ベトナム人全体のマジョリティであるキン族は僅か15％の「マイノリティ」である。サパ周辺には、約300年から100年前（多くは200年前後）、漢民族の南下によって押し出される形で中国中南部から南下してきた、モンH'mong（中国名苗ミャオMiao）、ザオDao（中国名瑶ヤオYao）等、ザイGiay、タイTay、シャフォXa Pho等山岳民族が住んでいる。彼らの多くはノマド的に移動しながら棚田を耕す民族であるが、現在では定住している（ベトナム政府によってそうさせられている）。

この地が少数民族観光地として脚光を浴びるようになったのは、極めて最近のことである。サパの町自体は、植民地支配していたフランス人が1920年代頃からフランス人用の避暑地として観光開発した経緯はあるが[3]、後述するように1954年のディエン・ビエン・フーの戦いで空爆を受けて以来、戦場化したこの地域は、1990年代に至るまでは観光地としては廃棄された町であった。しかし、観光と関係がなかった少数民族にとっては、サパの町は宗主国からフランス人が来る前から物々交換的交易の中心であり、戦場化したときでさえ、少数民族の交易は行われていたと言われている。今でも町の中心にある市場には農産物等を持って彼らが毎日やって来る（1995年に市場が鉄筋の建物に改築されるまでは市は土曜と日曜が主であったという）。だがしかし、現在彼ら、特に若い女性たちがサパの町に毎日通う主な目的は農作物や家畜等の売買ではない。観光客に土産物を観光客に売り歩く者も多い。一部はホテル（日雇いのガイドとしてであるが）等サービス産業に従事している（日雇いであってもホテル等の雇われる労働者になれる者はかなり幸運な方であるが）。現在では市場も観光のアトラクションとなりつつあり、観光客の行き交う場となっている（一部の少数民族は観光客が市場に出入りすることを

土産物を押し売りするモン族の女性

嫌う)。

この町はディエン・ビエン・フーの戦いの際には空爆を受け、ベトナム戦争終結後1979年の中越戦争の舞台になった場所でもあり、戦争終結後も小規模な紛争は80年代まで続き、しばらくは観光客が訪れる場所ではなかった。外国人観光客が訪れるようになったのはドイモイ政策が軌道に乗り出した1990年代からであり、観光地といえるようになったのは観光ビザ等の解放が進んだ2000年代以降である。サパと周辺の山岳地帯は、1994年にはホアンリエン自然保護区（Hoang Lien Natural Reserve）に指定され、さらに2002年には国立公園へと格上げされている。このように、この地域は、現在のようなトレッキング・ツアー主流の本格的な民族見学観光地になってからはまだ10年くらいしか経っていない(戦前にフランス人によって開発された時にはあくまでも「避暑地」であり、少数民族は観光対象ではなかった)。

観光地としてのこの地域は現在、「表舞台」と「裏舞台」の差異からなる観光の構造を持っている。すなわち、サパの町を「表舞台」とすると、棚田が拡がる周辺20㎞圏内に住む少数民族の居住地域は「裏舞台」であり、ガイド付きトレッキング・ツアーで「表舞台」から「裏舞台」を覗き見る構造になっている（ほとんどの客はハノイ市内の代理店が主催するトレッキング・ツアーに参加しており、ハノイを中心に考えるとハノイが「表舞台」であり、サパが「裏舞台」と見ることもできる)。ハノイからの列車の終点であるラオカイの町から早朝発車するマイクロ・バスの向かう先はこの町であり、３、４本ある夜行列車でラオカイの駅に到着した観光客の多くは、２時間後にはサパの町の中心部に到着する。前述したようにサパは1920年代より、欧米人の避暑地として発展した町であるが、現在の観光客のほとんどは周辺の少数民族の村を訪れるトレッキング客である。サパの町全体が、かつては少数民族の市場としての機能を持った町ではあるのだが、農業を営む彼らは原則として町には住まないため、町の中だけでは彼らの「本当」の生活は見ることができない。実際には少数民族のなかでもモン族（特に女性）は、町に部屋を借りて、あるいは市場のなかで、あるいは町の裏山に住んでいることも多い。夜には彼らの一部はバー等で遊んでいるのだが、彼女らの姿をバーで見ても、観光客にとってそれは「本当」の姿とは見なされない。

町には観光客用のホテルやレストラン、土産物屋、マッサージ屋等が立ち並ぶ。バーやディスコ・クラブ等都市の遊興施設も当然存在するようになる。しかし、欧米人トレッキング客が主体（欧米人の数と同数程度の国内客もいるがあまり目立たない）のこの町の夜の静寂は保たれており、また多くのホテルやレストラン、商店もそれなりに少数民族観光の風情を良く演出している。サパの町は「表舞台」ではあるが、あくまでも観光のハイライトではなく、トレッキングで「本当」少数民族を見に行くための玄関であり基地なのである。

少数民族の「本当」の姿は、「表舞台」の町サパにはなく、「裏舞台」である周辺農村部にある。

プールバーは彼女たちの「本当」の場ではない？

少数民族トレッキング・ツアーは「自然観察」も含むが、ガイドは「自然」をあくまでも彼らの生活との関連で説明する。トレッキング・ツアーはあくまでも少数民族の文化体験ツアーなのである。ツアー・ガイドの多くは少数民族ではなくベトナムの主要民族であるキン族である。教育が行き届いていない少数民族、特にこの地域の全人口の50％以上を占めるモン族は、小学校も出ていない者も多く（現在20歳以下の世代は大体小学校の教育は受けているが、毎日通っていたとは限らない）国語であるベトナム語も怪しい。町で毎日外国人と接触している少数民族（特にモン族の女性）は英語を流暢に使うが[4]、学校教育で身につけたものでないために、読み書きはできない。モン族の女性の一部はガイドとしてホテルやツアー会社に雇われることもあるが、正式のガイドではなく、日雇いの使い捨てガイドとしてである。したがって、トレッキングの「裏舞台」の解説はあくまでも、キン族から見た少数民族についてであり、少数民族の女性がガイドとして日雇いで雇われた場合でも、キン族ガイドの解説モデルを踏襲するように指示される。

トレッキングの現場では、観光の「非日常」経験は「日常」的なものに押しつぶされつつある。ガイドに引き連れられてゆくツアーは（ガイドなしでトレッキングに行くことは原則的に許されていない）、ほぼ同じ時間に出発し、同じコースを辿るため（コースはいくつかあるが）、棚田のあぜ道には数団体が数珠つなぎになるといった、都会の道路の渋滞のような「日常的」光景が繰り広げられる。また、コース上にはサパの町にあるような「日常的」な土産物屋が乱立する。少数民族の「本当」の生活を見るはずの「裏舞台」が、「非日常的」で「真正」な棚田の風景と、「日常的な」土産物屋が混在するキッチュな場になりつつある。

ツアー客の多くは町での宿泊に加えて、トレッキング先の農村部の民宿で宿泊をする者も多い。日帰りのツアーよりも、一泊のツアーが主流であり、観光客にも農村部での民泊（home stayと呼ばれている）の方が好まれる。多くのトレッキング・ツアーの終点であるタバーン

モン族がガイドするトレッキング・ツアー

（Ta Van）の集落には、1990年代から教育程度の高いザイ族が経営する民宿が40軒ほど開業している。ここにも近年、民族風のバーやスパができ、「裏舞台」は次第に「表舞台」と区別がつかないものになりつつある。

マッキャーネルが言うように「裏舞台」もまた観光用に演出されたものである。しかし、観光の「裏舞台」には普通は二つの要素が混在している。一つは「生活」の文脈を持つ舞台である。もう一つは「観光」の文脈を持つ舞台である。両方とも観光客にとっては「非日常性」を志向するものである。しかしながら、「生活」の文脈における「非日常性」は、見世物ではなく、スペクタクル化しにくいため、「裏舞台」からも次第に排除されてゆく。そして「裏舞台」は、「表舞台」とは差異化されてはいるものの、人工的な「観光」の文脈を使った「非日常性」の演出が支配的になる。「裏舞台」の文脈において「観光」の要素が強くなれば強くなるほど、「裏舞台」は「表舞台」に近づいてゆく。

著者は6年前からモン族の一リネージを観察しているが、町ではモン族の若い男性には出会うことはない。若い男性たちはサパの町から15kmほど離れた村で農業に勤しみ、女性たちは毎日徒歩かバイクでサパの町まで通っている。毎日町まで通うのが大変なため、彼女らの一部は町のなかに部屋を借りている。6年前に最初に会ったときには、彼女たちは観光客に土産物を押し売りするくらいしか町での仕事がなかったため、収入はほとんどなく（あっても部屋代と携帯電話代に消えてしまう）、いつも同じ汚れた民族服を着ていた。しかし、彼女たちの一部がホテルにガイドとして日雇いで雇われ出し（と言っても一日3ドルの給料であったが）、彼女たちの一部は民族服を脱ぎ捨て、Tシャツ、ジーパンで着飾る者も現れてきた。しかし、昨年からは彼女たちの中のリーダーが中心となって、ホテルに頼らず自分たちでツアー・ガイドを主催するようになった[5]。収入も格段に向上した。その結果、目に見えて変わったのは、彼女たちの服装である。Tシャツ、ジーパンであった者も、再度今度は新調した民族服を着るよ

うになったのである（いつも着ているわけではないが）。観光のまなざしが彼女たちに再び民族服を着るようにさせたのである。すなわち「生活」の文脈で着ていた民族服から「生活」の文脈と「観光」の文脈が混在するＴシャツ、ジーパンへ。そして、民族服への帰還は「観光」の文脈によるものである。民族服は観光客にとっては「非日常」なものであり、本来「裏舞台」に属するものである。この「裏舞台」の衣装が「生活」の文脈の上から「観光」の文脈の上へと布置を変える。このとき再度「表舞台」の衣装（町の服装が「表舞台」の衣装だとすれば、Ｔシャツ、ジーパンがそうであろう）から人工的に差異化された「裏舞台」の衣装が彼女らの民族意識とともに立ち現れる。これこそが新調された民族衣装の意味である。

こうして彼女たちは、サパの町の中、英語を流暢に使い、観光客の前では新調された民族服を着て過ごすようになる。ところがしかし、彼女たちの家族メンバーの半数である男性たちは「観光」の文脈には全く乗っていないため、彼女たちは「生活」の文脈でしか生きることができない男性たちとの距離を次第に広げてゆく。サパに住むモン族の女性は急速に「晩婚化」している（といっても25歳くらいでは何とか相手を見つけるのだが）。今のところ、彼女たちは文脈のチャネリングを上手くやってのけているように思えるが、この状態がどこまで持つかは分からない。また、モン族の女性たちでも、今のところ、観光の文脈に乗り、観光に包摂されているのは若い一部の者だけであり、多くは観光の文脈に乗ることさえできないほど「みすぼらしい」民族服を着たまま、観光化の文脈からさえ排除されていることも忘れてはならないだろう。

モン族とは違い、教育熱心で裕福であるザイ族やザオ族の一部は、民泊（ホームステイ）という収益性のある事業を立ち上げ、自らの生活を観光の文脈と混在させながらも、観光産業のなかに何とか包摂されることに成功している。だがしかし、多くの少数民族は、特にモン族は、自ら観光の対象になりながら、観光産業からはほとんど排除されている。

民宿（ホームステイ）を営むザオ族

3　中国・雲南省の納西族の場合

前節では、文化の観光化による「裏舞台」の変節、そのことが引き起こす「文化」の分裂について述べた。観光の文化や経済に上手く乗る人々と上手く乗れない人々の分裂、「裏舞台」の中の「観光」と「生活」が混在し、さらにこの二つの分裂が露わになりつつあるのがベトナムの民族観光の特徴であった。これから取り上げる中国の民俗観光は、一民族ごと一気に観光の文脈に乗せてゆく。しかし、観光地において「観光」と「生活」の混在と分裂を回避し、自らの生活文化をトータルに「観光」の文脈に入れ込むことが、少数民族の自立につながるとは限らない。少数民族が観光化されることにより、「生活」の文脈が一気に「観光」の文脈へ、名実共に置き換えられていった例として中国雲南省麗江の例を見てゆこう。

観光客でごった返す麗江

中国雲南省の麗江は、中国が外国から観光客を本格的に受け入れるようになった1980年代より、欧米人バックパッカーが集合する地域であった。1988年に筆者も麗江を訪れ旧市街（故城）の民宿（客桟）に３日程滞在している。道路事情が悪かった当時は昆明から大理まで夜行バスで８時間くらいかかり（現在は高速道路で約４時間）、さらに大理から約５時間（現在では道路事情も良くなり約３時間、近くには飛行場もある）、谷底が見えないほど切り立った崖の縁を這うような危険な道をバスに揺られて行かなくてはならなかった。町の中心部には納西族の居住地域である故城地区（四方街）があり、この地区を取り囲むように新市街地が少しだけ拡がっていた。中心部はあくまでも故城地区であった。

故城地区にいる観光客のほとんどは欧米人バックパッカーであり、地区もほとんど手が加えておらず、レストランやバー、民宿（客桟）等は散在したが、表通りも裏通りも納西族の日常生活で溢れていた。だらだらと長期で滞在しているヒッピー風欧米人のバックパッカーたちを、拒否するでもなく歓迎するでもなく遠巻きに見ながら、納西族の故城住人はなかば無視し

て生活をしていたように記憶している。

国内観光客も増えだした麗江市を訪れた1990年の観光客数は延べで9.6万人であり、その内外国人が６千人である（車、2008)。1994年の観光客は22万人（内外国人1.5万人）と国内観光客を中心に観光客は増え出す。しかし、1996年にはＭ７の直下型地震が麗江市一帯を襲い、納西民族の伝統的な街並みの大半は崩壊し、伝統家屋を保存した観光地としては再起不能とまで言われた。だが、この地震で被害を受けた納西族の伝統家屋の話題が世界中のメディアに乗ると事態は一変した。貴重な伝統住居が残されていることが世界に知れ渡り、1997年に麗江故城はユネスコ世界遺産に登録されたのである。観光客は急増し、1998年には一気に201万人へと膨張する。201万人の内外国人客は４．６万人でしかいないことから、いかに国内客が急増したかが分かる。国内客中心に急増した観光客のほとんどは限られた地域である故城地区へと向かう。2008年の入込み客数は625万人（内外国人47万人）である。現在では、迷路のように入り組んだ故城の通りの奥まで、観光客でごった返す光景が日常となっている。

夜間の照明も演出されている

ベトナムのサパと同様、麗江の観光を作り上げているまなざしのあり方も「表舞台」から「裏舞台」をのぞき込む構造を持っている。麗江の場合、少数民族居住地区は町の中心にあるので、町自体が「裏舞台」を構成していると考えた方がよいだろう。敢えて言えば、雲南省の省都である昆明が「表舞台」なら、そこで目にした少数民族の風俗（例えば、昆明にある雲南民族村や雲南民族博物館等）の「真正」な姿を、「裏舞台」の大理まで見にゆく。しかし、大理は早くから観光化されて「表舞台」化されており、すでに「裏舞台」とは言えない。そこで観光客はさらなる「裏舞台」を求めて麗江を訪れるといった構造になっている。雲南省で最も奥に位置した「裏舞台」の麗江は、現在では「表舞台」化の進行が止まらない。麗江故城の「真正性」

を危機に陥れている原因の一つは、この地域が地震に見舞われ文化財の家屋が崩壊したことから、建物の復元という「視覚的」観光要素にこだわった点にある。建物は見事に復元され、夜には伝統建築を幻想的に表現するために間接照明による電飾が施され[6]、さらには増えすぎた観光客に対応するべく、故城を拡張し（復元工事とも言える）、故城地区面積は約２倍近くに拡がり「新しい」故城が出現しつつある。このような、ブームの結果起こったことは何か。限られた故城地区に多くの業者が押しかけたための賃貸料の異常な高騰である。2009年の聞き取り調査では、間口５Ｍほどのスペース（奥行きは７，８Ｍか。この程度のスペースが基本形である）の年間賃貸料が10万元から20万元であった（１元≒15円）。

聞き取りを行った杭州から来た服屋は、裏手なので年10万元の賃貸料、この町に来て一年で店をたたむ準備（閉店セール中）をしていると言う。中心にある広場近くのやはり服飾を扱っている店のオーナーは福建省から来たという。年間20万元の賃貸料を払っている。このオーナーは、一年前までは雲南省南部の町、西双版納で店を開いていた。流行っている観光地で稼ぎ、ブームが去れば他の観光地へと移動するという商法をしているという。新しくできたばかりのバーの若いオーナーにも聞いてみた。彼は四川省からやって来たばかりだ。年間10万元の賃貸料。客はまだあまり入らないが、観光地の生活は刺激があり楽しいという。妻が納西族だというアウトドアショップのオーナーは、年間20万元の賃貸料を払っている。賃貸料高騰のため、筆者が前年に訪れたときに比べ間口が半分になっていた。

奥の家までみんな貸し出していて人気がない

このように、納西族の居住地域であるはずの故城の人通りの多い地区には、納西族の人々はほとんど住んでいない。観光客があまり行かない故城地区奥の方まで行ってみると、そこにはテナントを募集しているらしい張り紙があちこちに貼ってある。四合院作りの伝統家屋にも人気はない。結局、故城地区（四方街）に住んでいた納西族の住民の多くは、今では故城には住んでいない。彼らは、自分の家を外から来た漢族の（一部は白族等他の少数民族、他の地域か

元住民のコミュニティ

ら来た納西族もいる）業者に貸し、一家は故城地区から離れたゲート付きマンション等に住んでいる。しかし、自分たちのコミュニティーが懐かしくて昼間は毎日のように故城地区に通っている。従って、昼間はあちこちに集まりおしゃべりをする納西族の姿を見かける。

観光化の圧倒的な力によって、納西族の「生活」の文脈は引きはがされ、「観光」の文脈に置き換えられている。故城内には観光客のための劇場があり、ショーと化した納西族の踊りがプロの役者によって演じられ披露されている[7]。故城に家を持つ納西族の住人は観光化の恩恵に服してはいる。高い賃貸料が彼らに支払われている。しかしながら、観光客に示す文化は彼らの「生活」の残り香のある建物だけであり、「生活」そのものではない。彼らが故城を去る理由は、賃貸料収入だけの問題ではないのかも知れない。観光客が押し寄せる故城で静かに生活を送ることはもう不可能であるともいえる。いずれにせよ、彼らの「生活」は彼らの住居から「排除」されている。

「復元」？で創られる新しい「故城」

先にも述べたように、故城の「復元」工事が行われ、「新しい」故城が、「古い」故城に隣接して拡がっている。ここには納西族の生活は完全にない。建物のみが納西族風であるだけで、

文化の展示さえほとんどない。かつて観光客にとっては「非日常」である、少数民族の「真正」な生活文化があったはずの「裏舞台」は、ほとんど「表舞台」と化している。「非日常」の「裏舞台」を求める観光客は、故城地区から市の郊外に残存する納西族の集落、白沙地区へと向かう。しかし、ここに待ち受けているのは、村に入るための入村料であり、ここでも状況は故城地区と同じである。さらに「裏舞台」を求める観光客は、麗江からさらに約５時間バスで北上したところにあるチベット族の町、香格里拉（観光を柱に活性化を図ろうと、2001年に「中甸」から名前を変えた）に向かう。しかし、ここでもやはり状況は麗江と変わらない。

おわりに―観光への依存と自立

ベトナムのサパで見た少数民族の観光化の姿は、観光化に上手く適応する少数民族と、適応できない少数民族との分裂、観光の文脈に合致する文化の包摂と、合致しない文化の排除だった。ベトナム・サパの場合、例えばベトナム政府が世界遺産化を図ろうと、大々的に観光整備を進めるといったような動きはない。むしろ、棚田が拡がるトレッキングのコースの景観を明らかに破壊する簡易ダムの建設といった、観光化を否定するかのような動きさえ見える。ここ数年観光客数もあまり変わらず、上からの強引な観光化、それによる強引な少数民族の観光への包摂といった状況は見られない[8]。それでもなお、少数民族の生活は徐々に観光へと巻き込まれ、包摂されている。

彼らの生活文化のなかでも観光の文脈に馴染まないものは排除され、忘れ去られる。そして観光文化の影響を大きく受けた文化が彼らの「生活」文化に置き換えられる。次の世代には、人工的に「観光」が創り上げる「演出された」文化が、彼らの「生活」文化になっている可能性が高い。その時には、彼らの文化の「真正性」は人工的な「観光文化」の方にあるかも知れない。

中国・雲南省、麗江で見た少数民族納西族の観光化の姿は、政府（主に地方政府）の主導のもと、かなり強引に観光へと包摂されるものであった。麗江の事例の場合、少なくとも故城に住んでいた少数民族は経済的恩恵を受けている。しかしながら、彼らの「生活」文化のほとんどは、彼らの住居から、あるいは観光そのものから排除されている。彼らの「生活」文化は、ショー化した分かりやすい観光文化に置き換えられる。主に演じているのも彼ら自身ではない。レストランでインタビューした納西族の民族服の少女は納西族ではなく白族であった。

二つの地域における少数民族の観光化の状況に共通しているのは、少数民族自身が主体的に観光文化創造に関わっていない点である（サパの場合は一部のみが関わっている）。サパでは特に、社会的に最下層であるモン族は、外国人観光客への土産物の押し売りやせいぜい日雇い

のガイド程度しか観光に関わっていない。男女の文化の分裂や、生活文化の保護と変化のコントロールといった観光文化への主体的関わりを彼らは持てない。彼らは、他の誰かが作る観光に依存しているのである。

麗江の納西族の場合は、観光への依存が顕著である。賃貸料収入といった経済的依存も含めて、文化全体が観光依存を強めれば、彼らの文化は「生活」とはかけ離れた「死んだ」文化へと変容してゆくであろう。特に経済的依存は自立への意欲を削ぐ要因となる。

文化とは創られるものであり、決して不変のものではない。文化の「真正性」は歴史によって創られる「相対的」なものであることは前提とすべきである。それにしてもである。観光文化は、「生活」文化そのものを表現しているわけではない。そのなかのあるものを選択し、あるものを覆い隠し排除しているイデオロギー文化であるともいえる。少数民族が観光化されるとき、包摂されたり、排除されたりするのは彼らの「生活」の経済的側面ばかりではない。観光化によって彼らは観光のためのイデオロギーとしての文化を押しつけられる。

重ねて言うが、文化とは創られるものである。文化を保持すべき当事者がそれに自覚的でなければならない。観光によって文化が単なる「イデオロギー」へと化すことがないようにするためには、少数民族の自立と彼らの観光文化創造への関与が欠かせない。

注

1　フィールドワークの記録は6年間6回に及ぶベトナム、サパを中心に、6年間4回の中国・雲南省、麗江で行ったものである。

2　1920年代に湿地帯を埋め立てて作った町であり、砂浜の砂も島外から運んできたものである。

3　1912年には最初のホテルが開業し、1917年には町の中に旅行代理店ができている。しかし、本格的な開発は1920年代になされている。1920年にハノイからラオカイまでの鉄道が開通し、1924年にはラオカイからの自動車道が開通した。1924年には900人のヨーロッパ人がサパを訪れたという記録がある(Pham Hoan Hai 2003:116-117)。

4　屈折、時制等を省略した独特の英語であるが、欧米人とのコミュニケーションにおいては特に困ることはない。

5　これは実は筆者が提案して彼女たちが自主的に始めたのものだが。

6　多くの中国の観光地は、よく似た間接照明による電飾を行っている（例えば、蘇州も同様）。

7　中心にある広場でも納西族の踊りが披露されているが、これは地域の社区の人たち（実際には多くは地域には住んでいないが）が交代で踊っている。

8　現在最も問題となっているのは、モン族の若い女性の中国への連れ去り（誘拐とは少し違うようである）である。

須　藤　　廣

＜参考文献＞

Graburn, N., H. H., (1989) Tourism: The Sacred Journey　Smith,V. (eds.) *Host and Guests: Anthropology of Tourism second edition*, Philadelphia: University of Pennsylvania press

Pham Hoang Hai, (2003) *SAPA in the Midst of Clouds*, Hanoi: National Political Publishing House

車震宇（2008）『伝統村落：旅游開発与形態変化』科学出版社

ジョン・アーリ（1995＝1990）加太宏邦訳『観光のまなざし』法政大学出版局

――――――（2003＝1995）大澤善信監訳『場所を消費する』法政大学出版局

マックス・ウェーバー（1989＝1920）大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店

ジャン・ボードリアール＆マルク・ギョーム（1995＝1994）塚原史、石田和男訳『世紀末の他者たち』紀伊国屋書店

アーヴィン・ゴフマン｛1974＝1959｝石黒毅訳『行為と演技』誠信書房

ピーター・Lバーガー＆ハンスフィールド・ケルナー（1987＝1981）森下伸也訳『社会学再考――方法としての解釈』新曜社

ダニエル・J.ブーアスティン（1964＝1962）星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代―マスコミが製造する事実』東京創元社

マイク・フェザーストーン（1999＝1991）川崎賢一・小川葉子編著訳、池田緑訳『消費文化とポストモダニズム上巻』恒星社厚生閣

ディーン・マキャーネル（2012＝1999）安村克己、須藤廣、高橋雄一郎、堀野正人、遠藤英樹、寺岡信悟訳『ザ・ツーリスト―高度近代社会の構造分析』学文社

ジョシュア・メイロウィッツ（2003＝1985）安川一、高橋啓子、上谷香陽訳『場所感の喪失―電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』新曜社

ロバート・ヴェンチューリ他（1978＝1972）石井和紘、伊藤公文訳『ラスベガス』鹿島出版会

須藤廣＆遠藤英樹（2005）『観光化する社会―ツーリズム研究の冒険的試み』明石書店

須藤廣（2008）『観光化する社会―観光社会学の理論と応用』ナカニシヤ出版

―――（2012）『ツーリズムとポストモダン社会―後期近代における観光の両義性』明石書店